

で、生活環境にある多くの物象を、主観的に感じながら、更に過去の経験概念が、現在の自主的感覚を通して、経験しながら発展をさせるもので、常に感覚と知覚の両面を持ちながら経験を体得して行く形である。この感じ方は時には主観的な場合もあり、客観的な場合もあるが、感覚に幅があり、全一的な中にも、主観と客観の調和と、一種のまとまりが見られる。従って想像も、鋭い飛躍は見えませんが、健全な想像を描き、想像の領域は広いと云えよう。表現も、大胆に見えながらも、安定し、表現に対する抵抗も見えないが、自ずから一つの傾向を形成します。色彩も、だいたいに於て安定して居ると云えよう。

ここで幼児の造形感覚を、大別して分類すると、主観的な型と、客観的な型、共有的な型となるが、幼児全体について考えてみると、表現にも、感じ方にも、環境、その他の影響があるにせよ、本質的には、これらの三つの型が存在して居るものと考察される。

同一家庭で条件が、ほとんど同じであっても、兄弟に別々の型が示され、性格の違いが見られるものである。兄弟三人以上通園した家庭、十三軒について調査した結果、三人同一型であった例が、一例、二人同一型であった例が三例であった。又一卵性双生児の場合も、三組中、二組の双生児は、異った型を示している。

然しながら、生長発育の過程からみると、第一の型は、年少時に於て、第二、第三の型のものをも含んで居ると考察される。これは知性の発育に差があつて、知性によって影響される結果であろうと思われる。又これは、少年期を過ぎる頃迄には当然、大部分の者が影響を受けるものではあるが、本質的には何等かの形で残されて行くものと考えられる。

又私達保育担当者は、これら三つの型の相違に対して、軽々し

く、優劣、善悪を決定つける事は出来ないし、表現に於ても徒らに善悪の結論は出すべきではない。

この三つの本質的な感覚を肯定した上で、私共は、それぞれの幼児の造形教育の場で、造形の三要素である。色彩、形態、材質の面に於て、如何にして発達段階に則しながら、積極的に経験を与え、造形感覚を更に助長させ得るかが問題となってくる。

造形の教育の根本に於ても、又全般的な幼児教育に於ても、真実を把握し、その真実を愛し、自主的に自己を表現する事によって、人間形成のプロセスに於ける幼児期の教育の一部が達成させられるとすれば、真実を如何にして把握するかは、感覚と知覚による経験の集積であろう。洗練された、鋭敏な感覚と、知覚を先ず育て、美しい豊かな想像の上に、自主的表現を材ち建てさせることを目標に、造形教育が考えられなければならない。

以上、や、具体性を欠いた表現ではあるが、調査資料が複雑で多い為、統計的説明の資料の整理が間に合わなかつた事をおわびして、発表を終る。

幼児画に関する基本的研究 (二)

栄光幼稚園

日名子太郎

幼児期の絵画教育の方法論に関する基本的問題として、

1 幼児の色彩嗜好は、発達の因子と環境的因子の何れに多く支配されるか。

2 幼児の配色嗜好が、指導によって変えられるか否か。
の二点につき、調査、実験を行ったので以下報告する次第である。

I 幼児の色彩好悪並びにその両親との相関々係について

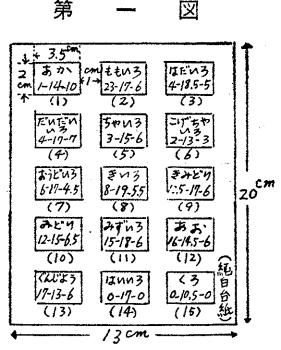
[a] 調査方法

細野直志氏が「児童・生徒の色彩嗜好の傾向」(日本応用心理学会第十一回大会発表)に用いた方法を幼児向に改訂使用。

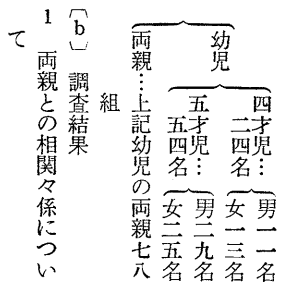
1 刺戟色彩とその型式(第一図)……純白台紙にクレパス手塗り色紙を貼付したもの。

2 回答の求め方

好きな色、嫌いな色各三色宛を選び用紙に番号で記入する。
被験者



註・色名の下の数字は色研究記号で、色相明度・彩度を示す。()内の番号は色彩番号



1 [b] 調査結果
両親との相関々係について

○相関々係の種類
①一致型……親、子が好悪

年令	型性	①一致型	②相反型	③独立型	④父母相反	⑤無選択	計
四才児	男女	12% 17	19% 20	47% (17%) 39 (15)	3% 1	19% 23	100% 100
五才児	男女	21 13	12 19	43 (14) 44 (15)	2 1	22 23	100 100

第一表

この類型に基き整理した結果が第一表である。何れもx²検定の結果、危険率1%以下で有意であるから、父、母、子の色彩好悪の相関類型間には一定の傾向があることが判る。

- の何れかで一致する場合
- ②相反型……親、子が好悪の何れでも一致しない場合
 - ③独立型……父、母、子の何れかだけが単独で記入している場合
 - ④父母相反型……父母の選択が相反し、子は無記入の場合
 - ⑤無選択一致型……親子何れも記入なくその点で一致している場合

この相関類型中、特に本研究の目的から見て重要なのは、第一表の太い実線の枠で囲まれた①、②、③である。①一致型は、上表の如く、各年令の男女とも約一〇〜二〇%にすぎない、しかも、この中には子と父、母の何れかのみと一致する場合も含むのであるから、本調査のみで明確にすることはできぬまでも、幼児の色彩嗜好は環境的因子よりも発達の因子の方が影響することが多い」と考えられる。尚このことは③独立型の中で()内の子どものみが選択した場合の%をみても推察される。

2 幼児の色彩好悪の発達心理学考察(第二表)
この数字は色彩愛好指数 (Color Preference Quotient) = $P-H/T \times 100$ p示されている。但し P: ある色に対する愛好頻数 H: ある色に対する嫌悪頻数 T: 好悪頻数の合計。もし C.P. Q=0ならば愛好される色 C.P. Q=100ならば

第二表

年令	Color No 性	Color No														
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
四才児	男	3	2	-3	-1	-1	-3	-4	3	2	-1	2	4	-2	0	-2
	女	8	10	0	5	2	-6	-5	6	-3	-1	3	-1	-4	-5	-9
五才児	男	-1	-5	-9	-3	-2	-13	-8	18	7	5	10	9	5	-3	-16
	女	19	15	3	11	-6	-17	-9	13	-1	1	7	-2	-3	-15	-11

中性色、C、P、O、A、O ならば嫌悪される色である。この結果により、前記細野氏の小一より中三に到る調査と比較してみると、発達傾向をみる事ができる。(第三表)

この表で、四才児、五才児のらんの数字中()で囲まれた数字は、小一、小二のらんの数字と同種の色彩系列を表わす。()で囲まれない数字は、第一図に示された本研究の刺戟色彩の番号を示す。

II 幼児の配色に対する嗜好が指導により変わるか否か。
 (a) 方法
 先ず「配色一対比較表、(第四表)」により、配色嗜好を求めておき、次に第五表に示す「色彩訓練」を施行後、再び「配色一対比較表」を用いて前回からの変化を知りその影響を考える。

1 「配色一対比較表」の作成法
 (第四表参照)
 前記、色彩好悪調査に用いた一五種の色彩から、二色を選ぶ組合せを作ると一〇五種の配色を得る。この中から暖色(W)、中性色(N)、無彩色(O)の各色が洩れなく含まれ、且つ刺戟として適当なもの四八種を選び二四対の比較表とした。尚図柄も

四対の比較表とした。尚図柄も

第三表

性別	順位	学 年				
		四才児	五才児	小一	小二	小三
男	愛 好 色 (+)	1	12(26)	8(13)	5	5
		2	1(5) 8(13)	11	13	26
		3	2(4) 2(16) 11	12(26)	25 35	13
		4		9(16)	4, 23 16, 26 27, 52	25
		5		10(20) 13		20 35
子	嫌 悪 色 (-)	1		2(4)	6 9 12 15	1, 24 12, 30
		2	4(7) 5(1) 10(20)	7(11)	14 21 33	18 33
		3	13 15(3)	3	8, 24	18 2
		4	3 6(8)	15(3)	11 27 36	27 36
		5	7(11)	6(8)	3	3
女	愛 好 色 (+)	1	2(4)	1(5)	5	5
		2	1(5)	2(4)	35	35
		3	8(13)	8(13)	4 13	34
		4	4(7)	4(7)	7 32	4 13
		5	11	11	1, 25 10, 26 20, 34 23	32
子	嫌 悪 色 (-)	1	9(16)	5	27	1, 8, 24
		2	13	7(11)	36	36
		3	7(11) 14(2)	14(2)	8	27
		4	6(8) 15(3)	15(3)	2	2
		5	15(3)	6(8)	3	3

第四表

Figure	Plate No.	Color Combination	Plate No.	Color Combination
1	2	4(W)~1(C)	10	4(W)~2(W)
		4(W)~6(W)		4(W)~8(W)
2	11	2(W)~10(N)	22	4(W)~14(O)
		8(W)~10(N)		13(C)~14(O)
3	3	2(W)~3(W)	24	1(W)~14(O)
		6(W)~3(W)		5(W)~14(O)
4	4	9(N)~14(O)	12	1(W)~15(O)
		15(O)~14(O)		2(W)~15(O)
5	5	3(W)~11(C)	15	2(W)~9(N)
		3(W)~5(W)		6(W)~9(N)
6	6	9(N)~11(C)	13	8(W)~1(W)
		9(N)~10(N)		8(W)~15(O)
7	7	1(W)~5(W)	18	2(W)~11(C)
		1(W)~9(W)		12(C)~11(C)
8	8	2(W)~14(O)	14	8(W)~4(O)
		3(W)~14(O)		12(C)~14(O)
9	16	2(O)~5(W)	20	3(W)~12(C)
		6(W)~5(W)		3(W)~4(W)
10	1	11(C)~14(O)	9	1(W)~6(W)
		6(W)~14(O)		2(W)~6(W)
11	17	6(W)~7(W)	21	2(W)~7(W)
		4(W)~9(N)		5(W)~7(W)
12	23	2(W)~13(C)	19	8(W)~2(W)
		1(W)~13(C)		8(W)~3(W)

幾何学的図形(直線)
 抽象的図形(曲線)

九種
 一組
 *印はパング色のあるもの
 他は全部白

第五表

Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
6~14	4~6	3~6	14~15	3~5
8~10	1~15	8~15	12~14 (11)	6~9
5~7	13~14	1~13	6~14	
Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅷ	Ⅹ
9~10	1~5	3~14 (4)	1~6	4~8
5~6	6~7	11~12 (15)	3~8	3~12

第六表

年令	VP 試行	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17																	
		四才児	I	16	13	13	6	10	11	9	7	11	10	7	9	9	1	14	6
II	11		4	8	13	11	11	16	8	3	2	6	2	13	5	10	7	9	
変動		-5	-9	-5	7	1	0	7	1	-8	-8	-1	-7	4	4	-4	-1	-4	
五才児	I	10	9	10	8	12	13	13	1	9	6	14	9	6	13	17	2	4	5
	II	10	9	8	8	7	13	13	8	7	9	12	9	4	11	12	4	3	5
変動		0	0	-2	0	-5	0	0	7	-2	3	-2	0	-2	-2	-5	2	-1	0

2 「色彩訓練」の方法
具体的図形

抽象図形によるぬり絵式の色彩訓練を行うこととし、毎回使用する色彩を、こちらの指示した二〜三色のクレパスでぬらせる、この指定色彩は、前記「配色一対比較表」二四対中の一方の配色を用いることとした。この図形と指定色は第五表に示す。但し、指定色のみでは、被験者があきること考えて、指定色でぬったあとにはバックその他は、自由にぬらせるとか、

二種とした。

塗った図柄を切りぬかせて、再び別の用紙(白紙)にノリで貼って別の図柄を再構成させるなどの方法を併用した。

(b) 結果

前記「配色一対比較表」による幼児の嗜好調査の結果は、素点で示すこととし、良配色を選んだ分を一点とし、二四点満点で示す、この結果が第六表である。

これでわかるように、四才児、五才児とも第二回目の方が素点が低い。

四才児の素点差合計 $D_1 = -26$
五才児の素点差合計 $D_2 = -9$

この結果によれば、この種の色彩訓練では、その意図する方向に幼児の嗜好が動いたと考えることは出来がたい。むしろ逆の効果さえ想像させられる。

Finger Paintingに就いて

——精神薄弱児に施行せる結果——

大阪市立大学

小西勝一郎
並河信子
阿部洋子

目的

Finger-painting は複雑な描画技術を必要とせず、誰にでも容易にかけるという特性をもっているため、幼児や精神薄弱児のごとく未発達な子供の描画材料として最適なものと考えられるが、併し此等の子供達の指絵の特性について実験的に研究されたものは必ずし